

保育者の眼差し

……担任という視線

矢萩 恭子

年長組のクラスの子どもたち（三十四人）と園での生活をともにしながら、常に私が反芻していたことは、「担任として、クラスの子どもたち一人ひとりの気持ちをしっかりと受け止められているだろうか」ということだった。前年度入園してきたこのクラスの子どもたちも今やすっかり、園生活を自分な

りに展開できるまで幼稚園に慣れ、安心して関われる、友だちと呼べる相手を見つけ、それぞれにじっくりと遊び出し始めていた。こうなってくると、年少組の三歳児とは違って、一人ひとりをばらばらに見つめていくことは難しくなってきた、一緒に過ごしている子どもたち同士の間接性を抜きにしては、

どんな人の『いま』も見えてこない状況になってくる。しかも、子どもたち同士の関係性は、固定的なものであろうはずはなく、従って、ダイナミックに力動的に変化、変容しつづさまざまな現状を孕みつつ進行していく。

そんな中でも、担任としては、今各自がどういう方向へ伸びていこうとしているのか、どういうところで立ち止まり、助けを必要としているのか、何を喜びと感しているのかなど、子どもたちの姿が、表情が、視線が見える保育者でありたいと願う。

いつにない様子にはっとさせられる

五月の連休も明けたある土曜日。送り迎えのこの土曜日にS子は、珍しくグスグスと泣きながら登園してきた。この人がこんなにはっきりと感情を表に表すことはあまり見たことがなかったし、しかもテラスのところで母親と軽い押問答をしている姿など

更に普段は見られないことなので、私も少しどきっとした。母親に聞くと、履いてきた靴下が好みのものでなかったとのこと。真っ白で丈の長いハイソックスがよかったのに、履いてきた靴下はソックスだった。しかも、本人に聞くと、ゴワゴワしてかたいのがイヤだと私にも訴える。母親も本人の気持ちと、迫ってくる登園時間との両方を考えながらやきもきした朝のひとつを過ごしながらの、当惑した表情だった。

なぜだか分からないけれども、この日の朝に限って見せたS子のこだわりは、担任の私にはとても大事なものを感じられた。十分に迷って履いてくる靴下を決められなかったS子の気持ちや思い、一緒に着替え袋や、幼稚



園のたんすの中を探してみるが本人がこれならよし、と思えるものがなかなか見つからない。なおも、晴れ晴れとできない気持ちのS子が気になりながらも、次々に登園してくる他の子どもたちからの要求や対応に追われているうちに、S子は自分からこだわっていた靴下のことは諦めてしまった。

その後、朝の始まりからつまずいてしまったこの日は、友だちとも遊ばず、一人ポツンとしている。聞いてみると、「だれもあそんでくれない」とこれた、いつになく自分の気持ちを私に話してくれた。何をしていいかわからないけれども、遊べなくてさみしく思っているS子の気持ち伝わってきたので、私は一緒に手をつなぎ、園庭へ出た。そして、出会ったクラスの人を誘って一緒にいろおにをして遊んだ。

S子は、クラスの中では大変大人しく、控えめで静かな感じの子どもである。習い始めたピアノが大

好きで、絵を描いたり冠を作ったりすると、とても丁寧に緻密に色彩を塗り分けたりする。怒ったり、泣いたり、といった感情表現も普段はあまり示さないで、担任としてはついつい関わりの薄くなりがちな、だからこそいつも気に掛かっているといったところの子どもであった。そのS子に、こうしてこの日はとさせられる出来事があった、いつになくS子とじっくりと関わろうと努力するきっかけを私に与えてくれた。こういうことは、担任として大勢の子どもと生活しているとしばしば起こることである。

子どもたちのことを、見よう、分かれようという気持ちが前面に出て焦っているときほど、むしろ子どもたちとの距離が出来てしまい、十分に交わることが難しくなってしまう。もちろん、担任が満足して子どもたちと遊べているかどうかが大事なのでないことは分かっているものの、そんなときは、なんだ

かこの頃みんなとうまく遊べていないな、という感覚になる。逆に、クラスで何か問題が持ち上がって、何とかそれを解決の方向へ導けるように担任の知恵が要求されているときとか、ある子どもの行為に頭を悩ませていて、それにかがふりと向き合わせるを得ない状況が続いているとき、或いは、すごく盛り上がって続いている遊びに自分も夢中になって取り込まれているときなどは、子どもたちの存在を肌で感じる事が出来るのでいろいろな人のいろいろな面を垣間見るチャンスが多く訪れてくれるような気がする。子どもたちが、子ども同士の関係の中で十分自分らしさを出して活動していれば、それで十分なはずで、殊更担任がその関係性の中へ直接入れてもらう必要はないのだろうが、そういう日が続くと、「今日は違った視点から子どもたちの様子を見てみよう」とは思えずに、何か淋しいような気持ちになってしまう。子どもたちとの距離を保つの

も、互いに気心が知れて関係が安定してくるこの頃になると、意外と難しいということもある。外側から普段は見えないところを見てみようとか構えてみるものの、主客が渾然としたような担任の視線からは、かえって掴みどころのないこともある。子どもとともに生きた生活そのものなかにしつかりとどまるときこそ、担任も子どもと人間的な交流が持てるし、そういった人間的な交流のなかでこそ、相手のいろいろな面が肌で実感され得るということだろうか。しかし、やはり、一人の保育者が自覚して、意識できることには限りがある。もっとよく見るべきところを見落としてしまったり、目の当たりにしながら見えないでいることがたくさんある。それでは、一体担任として自分は、どうすればいいのだろうか。悩みに悩んでいるそういうとき、往々にして、子どもの方から私に気づかせてくれるような出来事に会おうことがあるのである。

繰り返し訪れる

五月のある朝の出来事によって、担任である私の視線は、その頃同時に起こっていた、いろいろな子どものいろいろな気になること、考えたいことなかで、S子の方へと焦点化された。私は、数日間S子を注意深く見守ることに努力した。しかし、これといって、大きな変化や困難がS子を襲っている気配は感じられないまま、その後平穩に毎日が過ぎ、一旦S子に向けられた担任としての注意の眼も再び日常の背景に退いてしまった。そして、秋を迎えた十月のある日にS子についてのこんな記録がある。

履いてきたスパッツが気に入らず、朝から泣いている。テラスで母親とぐじゅぐじゅやっていたが、母親が適当なところでスッと離れていたので、しばらく、保育室内をウロウロしてい

た。が、耐えきれず泣きだす。スパッツがズルズルしていてイヤだと言う。いろいろ慰めるが(Mも、上下おそろいでかわいいよ、と云ってくれる)、聞かないので私も様子を見ることにする。お面を作っていた仲よしのHと同じように画用紙を渡すと、一旦は、一緒に描き始めるが、あまり自分自身にその気はなかったよう为本の部屋にいたIを誘いに行く。ところが、はっきりとIに「いやだ」と断わられてしまい、困って私のところへ来る。「お客さんで入って行ってもいいのよ」と伝えるとホッとしてIのところへ行き、絵本を読み始める。

前にも似たようなことがあったな、とこのときの私は思った。そして、前回のとき以降のことでは母親をてこずらせることのないS子が、幼稚園に着てくるものことで、毎朝あれでもない、これでも

ないと時間を費やしていることを知った。母親は、スクールバスの迎えの時間に遅れてしまうことを気にしていたが、担任としては、S子のことであるから、年長ともなれば、もうこの服にしておきなさいと母親から言われれば我慢して家を出てくることもできるだろうとは思うが、他のことでは、すんなりと幼稚園の生活を過ごしてきたS子がこうやって、ずっと頑張って主張していることであるから、ときにはバスに乗り遅れてしまうことがあるから、出来るかぎりつきあってみてもらえないだろうかという考えを母親に話してみた。幸い、この母親は、建設的に私の話を受け取ってくれたので、「この子にとっても私にとっても、幼稚園生活もあとわずかだから、自分にできるときには幼稚園まで送ってこようと思う」と言っておきかけた。保育者として、私も、S子の一日の始まりである朝のひとときを丁寧に付き合うよう心がけることができた。

改めて考えてみる

前述のようなことがS子に関して起こっていた訳だが、私は、担任としてもっと深くS子の心に流れている戸惑いや悩みを感じ取って然るべきであったのだろうが、似たような場面に出くわしてもそれが何であるかそのときには、気づくことができなかった。秋になって次々とやってくる行事のことで忙しく過ごしていたなかで、この記録を書き残しながら、S子のことについて思いをめぐらせたことと思うが、その内容までは記録されていない。S子の示した出来事に対して私なりに感じ取ったことを支えにしてS子への対応や、見方を変えたり、新たにしたりしたはずではある



が、S子について何か結論めいた理解に達するといふことはなかったように記憶している。

だが、今改めてS子のことを思い出しながら、二年間のクラスの記録を読み直し、S子の生活する様子や表情を思い浮かべながら考えてみると、ある解釈が私のなかにぽっかりと浮かび上がって見える気がするのには不思議である。欠席も少なく毎日毎日きちんと幼稚園に登園してきてくれるS子であったが、そして、本人なりに一緒に過ごせる友だちもでき、何かのときには、相手を手伝ったり助けたりしてS子なりに持てる力を発揮してくれるようにはなっていたが、自分をどんどんだしてくる他の子どもたちとは違ってどうしても影が薄くなりがちであった。もちろん本人の性格もあり、大人しく消極的であることがS子のありのままの姿であるなら保育者として私も、それをそのままに受け止めるべきであらう。

しかし、今になって考えてみると、クラスの中で、或いは家庭とは違う幼稚園という外の世界で、S子は、自分がどんな姿でいたらいのか、どんな顔を見せて過ごしたらいのか、決めかね、迷い続けていたのではないだろうか、というふうに思われるのである。特に、この秋頃は、だいたいにおいてどの家庭も進学する小学校のことで考え迷う時期となる。当然子どもたちの園での生活にもそのことを反映したと思われる様子が感じられる。いよいよ深まるクラスの友だち同士の関わりのおかげで、思い切り遊びながらも、一方でまだ見ぬ小学生としての自分の姿を子どもたちなりに楽しみに、あるいは不安に想像していることが伝わってきた。S子の家庭はそのことで迷ったり揺れたりしているようには見えなかったが、それでもクラスの中での互いの状態は、子どもたち相互に影響を与えあっていたのではないかと思われる。

一体、今自分はどんな姿でいたらいいのだろうか、友だちは自分をどんなふうに見ているのだろうか、この先どんな未来が待っているのだろうか……。S子は自分というものの輪郭に対する不安としてそんな思いを抱いていたのではなかったか。そして、そのS子にとって衣服は、そんな迷いを抱える剥き出しの自分というものを他者の眼から被ってくれると同時に、このように見えて欲しいという自分なりの姿を演出し、実現してくれるものなのではないか。こう考えることで、着るもの（そう言えばS子はヒラヒラのワンピースを好んで着ていた）や身につけるもの（こと）で、はっきりと自分を主張し、思い通りにいかないときに悲しさを表していたS子の気持ちに近づけたような気がするの、私の思い過しであらうか。

このように改めて考えてみると、その当時には思い至ることのできなかつた理解へつながる体験をす

ることができる。そして、一旦一つの理解の扉へ手がかけられると、S子が友だちと繰り返し遊んでいた遊び——ままごとの家の中でエプロンをつけたり、スカートを取り替えたりしながらいろいろな役、いろいろな自分になって遊んでいた——についても見えてくること（がありそう）である。こういう理解であるときS子を見守り、S子に接することができたらば何かが変わっていたのではないだろうか。

「感じ取る」から「見直す」へ

この夏のある研究会で、非常に私の心に働きかけてくることばがあった。

それは、参加者である一人の研究者の一言だった。その方は現職の幼稚園教諭による研究発表資



料を示しながら、保育者が一人ひとりの子どもを理解しようとして、子どもの内面に起こっていることに近づこうと試みるとき、「感じ取るところまでではできて、それをさらに見直すというのが難しい」という趣旨のことを発言された。私は、まさしく今自分が抱えている問題を指摘してもらったような気がしてその発言を聞いていた。

保育者として、大勢の子どもたちと共に精一杯の生活を与えられた喜びを感じる日々である。外側からは、喧騒や活気や同じような内容の繰り返しに見える保育の一日一日の中にも、子どもの傍らに共に生活する者にとっては、子どもたちについて、いろいろな感覚が生起し、心を痛めたり、驚いたり、感動に満たされたり、頭を悩ませたりすることの連続である。

へーちゃん、今日は思い切って仲間に入れてもらっていたなへーちゃんは、今日もままごとを一人じ

めして友だちから責められていた。私が間に入るとかえってかたくなになってしまおうだけれどうしたものだろうへーは、このごろ決まってジャングリズムのところから大声で私を呼ぶ。今日もなかなか行っってあげられなかったから明日はなるべくすぐ応えてあげられるようにしようへーとの関係は、どうも何かがうまくいってないようだ。二人の間になにが起こっているのだろうかへーの相手を断るときのことばづかいがどうも気になる。クラスの中でもきついことばがときどき聞こえてくるけれど、みんなにどんなふうにかがつかうてもらえるようにしたらいいだろう

保育者である私の頭の中に、たくさんのが同時進行して沸き起こっている。

「一日、保育の現場に出ることは、一冊の本を読むようなものだ。理解しながら読むこともできるし、

わけの分からぬまま読みとばすこともある。この頃の日記より^{*1}

「一日の保育を終えて、何と多くのことをしたかと思う。しかし振り返ってみると、何をしたのか、いちいち思い出せない^{*2}」

ことばに上ってくる以前の、出来事とも言い切れないような、数えきれないくらいたくさんのごに毎日出会っているものの、真剣に生きた時間はあつと言ふ間に過ぎて、実際の肉体的な労働へ駆り立てられながら次の日が続いてやって来てしまう。あの人のこと、この人のこと、気になりながら、考えながら、実際に具体的に次の日の生活の中で意識して目を凝らし、立ち向かえるのは、本当に限られた範囲のことではない。しかし、だからと言ってS子のごにこの様に、「一体何だったのだろう」「今更気づ

くなんて残念だ」ということを繰り返す訳にもいかない。確かに、そのときは、そのときとして精一杯かもしれない。だが、少しでも私が「子どもたち一人ひとり」を思うのであれば、そんな生活の中でも、立ち止まって振り返り、他者の意見や考えも視野に入れられるコミュニケーションを心がけながら、二度でも三度でも「見直す」ことの必要性和大切さを心から思うのである。

(洗足学園大学附属幼稚園)

*1 津守 真『保育者の地平』（ミネルヴァ書房、一

九九七年）二ページ

*2 前掲書、二一九ページ